



# 国経研だより No.84

国際経営研究所

〒220-8739 神奈川県横浜市西区みなとみらい 4-5-3

みなとみらいキャンパス 11007

TEL 045-664-3710(内線 4100)

鈴木 そよ子教授 廣田 律子教授 退職記念号

長きにわたる教育や研究活動へのご貢献に感謝し、ご功績に敬意を表します

所員一同

## 今月の内容

- P.1-2 経営学部らしさの「要」／鈴木 そよ子
- P.2-4 これまでの研究について／廣田 律子
- P4-5 シンポジウム開催報告／中見 真也
- P5-6 国経研からのお知らせ



## 経営学部らしさの「要」

鈴木 そよ子

1991年に着任して以来、人生の半分を神奈川県経営学部に所属して過ごしてきました。大変お世話になりました。

湘南ひらつかキャンパス開設後に教職課程の設置が決まり、3年目に着任し、私にその実施・運営が任されました。認可された課程表をもとにして、経営学部の先生方、理学部の先生方、教務課のみなさんのご協力を得て、また、横浜キャンパスの教職課程から学びながら、湘南ひらつかキャンパスの教職課程を形作っていく過程は、一つの事業を作り上げていくような醍醐味がありました。

学生のことを心底考えながら、優しさと厳しさを兼ね備えた教職課程を目指しました。一般的に教職課程では10%の学生が教職に就けたら十分と言われる中で、教職志望者皆が採用試験に合格して教員になれる課程づくりをしてきました。その後、専任として「教育心理学」や「教育方法論」の先生方を迎え、今日に至っています。

経営学部教員として、この34年間を振り返ってみると、学部の先生方と分担する仕事はそれぞれ違っていても、気心が知れた幼馴染と同じ場所ですと一緒にいるような安心

感さえありました。経営学部の先生方が見守って下さっているお蔭で、教職課程は少人数の専任教員でも、仕事を遂行して来られたのだと思います。

経営学部には、多様な研究分野の先生方がいらっしゃいます。経営学専門教育、旧・一般教育、語学、体育、教職課程と、多様な研究者が一つの学部を成しているのは、みなとみらいキャンパスの経営学部の特徴となっています。かつては、横浜キャンパスの外国語学部が、経営学部と同様な性格の学部でしたが、現在の人間科学部と外国語学部に変更されました。

経営学部が、専門性の異なる小集団の集合体になってしまう可能性もあったと思うのですが、そうはなりません。この36年間、神奈川県経営学部長としての内外に発信し続け、注目されてきました。今になって考えると、その背景にあるのは、教員が互いに理解しあい、協力できるシステムづくりの秘訣であり、それが創設当初から受け継がれてきていることがポイントではないかと思えます。

その一つが、学部内委員会です。経営学部は、全学委員を中心とした学部内委員会を組織しています。ある委員会は各分野からの委員で構

成し、ある委員会は関係しそうな教員で構成しています。複数の委員会を担当する教員もいます。全学に上げる経営学部の意見が、構成員の意見を吸収したものになるように、また、全学からの情報が関係者にきちんと伝わるように工夫されています。同時に、日頃話す機会のない教員同士の交流もでき、知り合い、話し合える関係が作られてきたわけです。

学部内委員会と並ぶようにして、国際経営学研究所や国際経営学会が、経営学部らしさを醸し出すとても重要な役割を果たしています。神奈川大学の各学部にタイアップしている研究所が、学部教員と外部の方々との研究活動を促進する機会になっていることは大前提ですが、この両組織の存在意義が1つの専門領域の教員だけで構成されている学部と、多様な研究領域の教員が集まっている学部では異なります。経営学部のような多様な分野の研究者集団の学部では、学部内の研究交流に寄与する役割も持っていると感じます。

日常的には、教員同士は、すれ違いざまに挨拶する程度の時間しか持たない中で、国際経営研究所の常任委員会に集まって、計画を立てたり、役割分担をしたりすることと合わせて、たまたま手に持っている本や、帰国したばかりの出張先での出来事などから話が広がる楽しさもあり、教員相互の自然な交流ができる機会と

もなってきました。

経営学部での人間関係づくりや複数領域がコラボした研究活動に影響を与えてきた成果は、発表され続けている多様な領域のプロジェクト・ペーパーに見ることができます。経営学部ならではの企画や入試のアイデアとしても展開されてきました。

経営学部にとって、他学部以上に研究所や学会が大切な役割をしているのですが、これを支える仕事は、所長や常任委員、会長や運営委員がいればできるというわけではありません。

継続的に全体の流れを把握し、資料を整理し、会議の準備をし、企画の方針に関わる情報を収集し、外部の研究協力者への対応をし、また、所員会議の準備をし、プロジェクト進行に関わる様々な相談窓口になり、機関誌の刊行やプロジェクト・ペーパーの刊行をスムーズに進める。

これらを常に行って下さる専従の職員さんがいてこそ、国際経営研究所の活動が「実」のあるものになっていることを、私たちはよくわかっています。そして、専従の職員さんが経営学部らしさの「要」であることを、よくわかっています。経営学部にとって、なくてはならない存在なのです。だからこそ、経営学部の教員が揃って、専従の職員さんを大切に思っているのです。

(所員/すずき・そよこ)

## これまでの研究について

廣田 律子

執筆の機会を得ましたので、これまで45年余り私が研究テーマにしてきたことを述べさせていただきます。

卒論では東アジアの死後結婚をテーマに、歴史文献や現代の調査記録から分析を進め、若くして結婚を経ず亡くなった男女の結婚は、家族の哀惜の念がベースとなり死者の願望をかなえ靈魂を鎮めるために行われ続けてきたと考えるに至りました。

修論では中国各地諸民族に伝承されてきた結婚の際に花嫁によって歌われる哭き歌・哭嫁歌をテーマとし、文献や上海の漢族や湖南の土家族へのフィールドワークによって資料を収集し分析しました。歌詞には結婚後の生活への不安、父母への感謝、媒酌人への不満、封建社会における女性の立場等の内容が歌い込まれます。哭嫁歌の歌われる場は、女性の教養レベルを示す場でもあり、また実家から婚家へ世界

を移動するにあたり設けられるこもりの場ともとらえることができると考えました。

その後中国でのフィールドワークが可能となり、80年代から2000年代初めは上海での死後結婚の調査、浙江・福建での女神陳靖姑の冒険譚をテーマとする説唱芸能の調査、江蘇・湖南・江西・貴州・陝西での除災招福の仮面劇や祭祀の調査を行いました。

陳靖姑は観音の血を受けて母が妊娠したとされる女神で、廬山で修行し法術を得、人々のために妖怪退治をしたり、雨乞いをする等、その冒険譚が鼓詞・評話・人形劇等種々な形態で民間芸能者によって祭祀を伴い説唱されます。

特に地獄巡りの内容には現世の日常生活の所業とその罰としての地獄が結びつけられ語られ、聞き手である女性や子どもに対しての教化を目的としていると思われる。陳靖姑への信仰は子授かりや子どもの順調な生育等の祈願と結びつき、浙江・福建・台湾に根つき、

物語の舞台となった土地はもとより大小の廟が信仰の拠点となっています。信仰の場において説唱が行われており、芸能が神祭りの場から発生することの証明ともなると考えます。

除災招福を目的とする仮面劇は、特に鬼神面と翁面に注目し、鬼神面の目の造形に悪霊を退散させる呪力のある呪眼の表現が見いだせる一方、翁面の造形に福をもたらす理想的な老いの表現が見いだせます。呪眼は黒目を残し白目をくりぬく等して視界を確保した造形で、見えない存在を見ることができ邪視に対抗することができる呪力を備えた目といえます。災いをなす存在を見だし、正体を暴き、やっつけ、

最終的に福をもたらす戦う鬼神面に必ず備わる表現です。長寿の祖先を表す翁は、子孫のもとを訪れ子孫繁栄や五穀豊穰等の願いに応じる福の神です。この鬼神と翁が毎年変わらず人々の祭りに訪れ除災招福を繰り返すのです。こうした研究を博論にまとめました。

この20年余りは中国・タイ・ベトナムにおいて少数民族のヤオの祭祀儀礼の調査研究を行ってきました。ヤオの祭祀儀礼では男性が祭司となる掛灯、祭司としての最高位を獲得する度戒、葬送儀礼、婚姻儀礼等を調査しました。

ヤオの儀礼では漢字で書かれた経典が複数使用され、祭司は経典を節をつけヤオ独自の音

訓で詠唱して、儀礼を進行させます。経典にはヤオの信仰する神々の名、神々の物語、儀礼の内容、呪文、マジカルなステップや符が図で示されたもの、儀礼で発行される文書をまとめたもの、儀礼の祭場を飾る文書や文言をまとめたもの等があります。経典は祭司間で長年にわたり書写され続けてきたもので、焼畑耕作

により移住を繰り返した結果、遠く離れたベトナムやタイに住むようになったヤオの祭司が所有する経典と中国の祭司が所有する経典には一致が見られます。ヤオの経典は世界記憶遺産として認定されるべき大変貴重な人類文化遺産だと考えます。

経典に記された記述の中で過海神話はヤオのアイデンティティーの根幹をなす神話といえ、その昔天災が続き船で移住した際嵐に遭い遭難するが、そのときピエンフン(盤王・盤皇)に救いを求めると願いがかない無事に上陸できたので、ピエンフンに謝恩の祭祀を行うようになったという内容です。この内容は儀礼の中



神奈川大学ひらつかキャンパス開催インドシナデイズ当日  
ヤオ祭司による神像画への開光儀礼の様子  
撮影:神奈川大学廣田ゼミ(2019年11月18日)

で多媒体で表現されます。経典に記された経文が詠唱されるだけでなく、祭壇上に過海神話の情景が供物によって表現されたり、舞踊によって表現されたり、過海が描かれた神像画が掛けられたりします。神話はヤオの儀礼を有機的に結び付ける紐帯として機能しているといえます。ヤオにとっては今でも願掛けの対象となるのは救世主ビエンフンであり、願いがかなったときの願ほどきの祭祀が継続して行われ続けているといえます。

当初神奈川大学プロジェクト研究所から出発した一般社団法人ヤオ族文化研究所は現在

ヤオ文化の研究拠点を形成しています。学部内では泉水先生、高城先生に所員となっていて、活動に対して神奈川大学からも複数回研究助成を頂いてきました。

これまで行ってきた研究テーマについて振り返りましたが、神奈川大学で過ごした33年に関わるすべてに感謝申し上げる次第です。

退職後はヤオにとって最重要といえる「還家願」儀礼の解説書を作り、次世代の儀礼の継承に役立てればと考えます。

(所員/ひろた・りつこ)

## シンポジウム開催報告

中見 真也

2026年2月14日の午後、神奈川大学みなとみらいキャンパス 4階米田吉盛記念講堂にて、国際経営研究所横浜みなとみらい学センター主催「食の持続可能性×食の未来に向けた産官学民共同研究プロジェクト」2025年度総括シンポジウムが開催された。

本プロジェクトは、三菱食品株式会社経営企画本部戦略研究所のご協力により、2025年6月に発足し、2026年1月まで、毎月1回、延べ8回の研究会を実施し、食の持続可能性に関わる様々な課題に対し、SCM関連メンバー（メーカー、卸、小売、物流、DX、決済等）間で、社会デザインの視点から10年後の食の未来（2035年）を研究し、社会実装を図ることを目的としている。

本年度の研究成果としては、さす先順位の高い課題を抽出し、②2026年度以降の実際の小売企業の店頭・MD・マーケティング活動を踏まえた実証実験に繋げるべく、「サステナブルリング」の概念として論点整理した。

当日は、基調講演として、中央大学商学部教授の木立真直先生より、「食品流通のこれからの課題と展望」というテーマで講演頂いた。講演内容は、①消費者にとっての食の位置と大転換期に

ある日本の食市場、②食品流通の特殊性・一般性、③食のライトワンマイルを支える食品小売業の最近の取組み、④食サプライチェーンの持続可能性確保に向けた食品卸売業の新たな戦略展開、⑤食品流通の「足元の課題」の5点であった。上記5つの論点を踏まえ、本研究会において、次年度



以降、検討すべき重要な課題としては、①流通の効率化。すなわち、流通時間の短縮と流通費用の節約にいかにか小売業は対応すべきか、②流通の不確定性をいかに吸収し、解消するか。すなわち、生産期間に対する流通期間の特性上の需給調整、Pricingの重要性、③高付加価値化をいかに実現するか。すなわち、商品、品揃え、サービス面での付加価値創造の在り方の3点である。講演を通じ、特に、考えさせられたのは、社会課題とし

での「フードデザート」に対するイギリスと日本の違いであった。サステナブルな食品流通の在り方を検討する上で、イギリスにおけるフードデザート問題は、食品小売業の寡占化がもたらした地域商業の衰退に対し、一方、日本におけるフードデザート問題は、高齢化の進展に伴う買物難民をいかに救うかに力点が置かれている点である。北海道のコープさっぽろの移動バス販売車や山梨県の過疎地に行政支援の下で経営を続けているローソン店舗の事例は、将来を見据えた日本のフードデザート問題への対応策として非常に参考となった。

基調講演後、神奈川大学経営学部准教授中見真也氏より、年度総括として、「サステナブルマーケティング」について講演し、続けて、三菱食品株式会社経営企画本部戦略研究所所長 本田裕之氏より、「サステナブルリング関連」の報告があり、次に、研究会参加メンバーを代表し、



D4DR 株式会社 代表取締役社長 藤元健太郎氏、イオンリテール株式会社 南関東カンパニー東神奈川事業部長 藤田一夫氏、ケンミン食品株式会社 営業企画室室長 田原義久氏より、各社のサステナブルマーケティングに関する取り組み事例を報告頂いた。最後に、上記メンバーを交え、サステナブルリングの諸課題への SCM メンバーとしての今後の対応、課題等について、活発なパネルディスカッションを行った。



本研究の2年目にあたる2026年度においては、本年度まとめたサステナブルリング上の諸課題に対し、優先順位をつけながら、研究会参加SCMメンバーの協力を得て、店頭やECでの消費者側、企業側両面の反応を仮説検証し、社会実装に繋げていく実践的な研究を続けていく予定である。

(所員/なかみ・しんや)

### 国際経営研究所からのお知らせ

#### ■ 公開講演会開催報告

国際経営研究所主催2025年度第2回ソーシャルデザインキャンプ

<日時>

2025年8月27日(水)13:00~8月29日(金)12:00 (3日間)

<会場>みなとみらいキャンパス6階

<テーマ>

『街をデザインする、新たな学びの場に』

<講師>

立教大学 名誉教授 中村 陽一 氏、マシュー建築設計事務所 松原 菜美子 氏、田中 比呂夢 氏

■ **公開研究会開催報告**

神奈川大学アジア研究センター 共同研究  
「アジアにおけるツーリズム・マーケティング」  
国際経営研究所 横浜みなとみらい学センター  
(共催)

<日時>

2025年12月18日(木)18:00-19:45

<場所>

みなとみらいキャンパス1階 ナレッジコア

<テーマ>

観光がつなぐアジア：横浜におけるインバウンドと都市ブランドの再構築

<講師>

CLASIX&CO. クラシックス合同会社

代表 青木 思生 氏

<登壇者>

- ・株式会社イントゥ  
代表取締役 観光ブランドプロデューサー  
小松崎 友子 氏
- ・一般社団法人横浜みなとみらい21  
企画調整部 部長 古木 淳 氏
- ・アジア研究センター共同研究代表者  
工学部 教授 高野倉 雅人
- ・経営学部 准教授 中見 真也

■ **シンポジウム開催報告**

国際経営研究所横浜みなとみらい学センター主催  
2025年度統括シンポジウム

<日時>

2026年2月14日(土)13:00-17:00

<会場>

みなとみらいキャンパス4階米田吉盛記念講堂

<テーマ>

『食の持続可能性×食の未来に向けた産官学民  
共同研究プロジェクト』

<講師>

中央大学商学部教授 木立 真直 氏

<登壇者>

- ・三菱食品株式会社経営企画本部戦略研究所  
所長 本田 裕之 氏
- ・D4DR株式会社  
代表取締役社長 藤元 健太郎 氏
- ・イオンリテール株式会社南関東カンパニー  
東神奈川事業部長 藤田 一夫 氏
- ・ケンミン食品株式会社  
営業企画室室長 田原 義久 氏
- ・経済学部 教授 浦上 拓也
- ・経営学部 准教授 中見 真也

■ **2025年度出版物**

<国際経営フォーラムNo.36号>

2025年12月25日刊行

<プロジェクト・ペーパー4件> (3月刊行)

- ◆ No.66 世界観とブランド  
(代表：津村 将章)
- ◆ No.67 XR (クロスリアリティ)技術およびメタバースの教育利用  
(代表：道用 大介)
- ◆ No.68 経営学部 国際ビジネスコミュニケーションプログラム (IBC) :  
問題点の特定とさらなる発展にむけて  
(代表：白石 万紀子)
- ◆ No.69 自己ヘルスケアと身体活動促進  
のための運動量定量化  
(代表：後藤 篤志)

<国経研だより>

No.82、No.83、No.84刊行

今年度も研究所の活動にご支援ご協力いただき  
ありがとうございました。

訃 報

名誉教授 後藤 伸 先生

客員研究員の後藤伸先生が 2026 年 2 月 10 日ご逝去  
されました。生前の多大なるご功績に深く感謝すると  
ともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。